



TITLE:

コメント 1

AUTHOR(S):

栗本, 一男

CITATION:

栗本, 一男. コメント 1. 京都大学高等教育研究 1996, 2: 24-26

ISSUE DATE:

1996-06-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/53505>

RIGHT:

コメント 1

栗本 一 男 先生（広島大学大学教育研究センター教授）

ご紹介いただきました栗本でございます。広島大学の大学教育研究センターで仕事をしていると紹介いただきましたが、まだセンターでの勤務は一年半ぐらいでして、大学教育研究の分野では新参者であります。それまで23年間ユネスコ教育局の教育政策・管理部門で、特にアジアの教育制度に関する仕事をしてまいりました。したがって、大学教育研究センターにまいりましても、どうも教育制度全体の中から大学だけをとり出し、その機能・運営に研究対象を集中することができずに、大学制度を取り巻く周辺のことがいろいろ気になるところであります。

今回のこの問題も、私が考えますに、どうも大学教育の中、しかも教科目のあり方としての教養教育に限定して問題を見過ぎてはいないかということが気になっています。大学大綱化の背景には、生涯学習社会の中での高等教育としての理念があり、その中で大学はどのように位置づけられるのかという問題になるわけですから、初等、中等教育、特に高等学校の教育と大学で行われる教育との関連、それから後、社会に出て企業内で受けているような教育、訓練というライフサイクルの全体から見た人間的教養を考える必要があると思います。それから企業での生活を送らない人が利用している生涯教育、現在生涯教育が隆盛になっていると言いますが、これはある意味で、学校教育の制度が機能を果たせなかったために社会がそれを補完しているのではないかというふうな考えをしております。そのために大学での教養教育を論じるにあたってはこれらの教育活動全体が視野に入っていなければならないと考えています。

そしてまた大学での教育についても、岡田先生が説明された大学の概念、これは伝統的な大学での教育に関連していますが、この伝統的な大学で行われてきた教授科目だとか教授内容、あるいは教授の手法でよいのかどうか。つまり、明治以後日本の教育制度というのは、外の社会と日本の社会にあった技術的なギャップを埋めることを主眼にした体系をとってきたわけですが、今はそれが同じ水準になってきている、場合によっては、外の社会の技術水準だとか知識水準の方が、大学自体のもつ知識・技術の水準を上回っているところも出てきている。大学の金看板であった研究活動にしても、現在では大学の外の社会で行われている研究の比重が大きいし、応用科学においては水準もまた高いものになっている。そういった時点に至っているので、大学教育の中で専門教育と教養教育がどのような形であるべきだろうかというところを、もう少し考えていかなければならないのではないかと思います。

特に現在教養教育の強化という形で、いろいろ実業界等で問題にされている能力というものは、教養教育に関連する教科の内容や教授法の問題というより日本の教育制度が制度的にうまく育ててこなかった能力について、問題にしているようなところがあると思います。というのは、伝統的に日本の大学は専門課程重視という形で、非常に実学化した人の育て方をした。この制度の基本になる考え方は、人間存在の基礎を形成する教養教育というのが、高等学校、中等学校の教育を通じて行われるということであった。ところがこれも独立した個人の尊厳と物の見方・考え方を鍛えることなく大学に入学することを目的とした技術的な勉強という形で、ある意味で一定の目的を持った勉強、つまり、実学になってしまっているという気がします。生きることを意味を体感し、他者との共生を実感する時間を十分に積み重ねて来なかった学生に対し、大学で急にものを考えられる、自分でものを考えられる人間を育てられるものかどうか、教養教育の科目という臨床的処置で片付くものとは思えません。

しかし二十何年外にいますと、日本の教育の実態について疎くなりまして、実情を理解するために小学校の低学年から順次観察してみたいと願っていたところ、この間、大阪の小学校の国際理解研究会のアドバイスをしてくれと言うので、引っぱり出されました。その時に授業参観をさしてもらいまして、1年生から6年生までずっと見てまいりました。面白かったのは、3年生くらいまでは児童が授業の中でも自分の声でものを言う。ところがもう6年生ぐらいになると、例えば大阪における国際的な立場とか広がりというテーマで6年生が議論するわけですが、もうすでに完全にマニュアル化した答えしか出てこない。それで指導されている先生に、これは生徒が自分の考えを述べているんじゃないくて、生徒がマニュアル化した答えを見つける形にしかならないじゃないか、というようなことを言いました。その先生は、実はそのクラスを四年間担任してきたと、教え方も悪かったんだとおっしゃっていましたが、こ

の方は指導力の強い立派な先生でした。問題は先生個人の指導力や指導方法を超えたものであるようです。いろいろ教えていただいたのですが、クラスの中でテーマを選んでディスカッションしても4年生ぐらいから、授業のあとで先生今の発言内容でよかったかというかたちで、子供たちが自分の回答・発言が正答(とされるべきもの)に近いかどうか確認するようになる。つまり学校の勉強というものが、さきほども岡田先生がおっしゃいましたように、ひとつの正解を求める勉強の仕方になっている。ひとつしか正解はないんだと。それは誰かが決める正解であって、自分が決める正解でないということですね。そうするともう、勉強自体全部が、コンピュータゲームのようなかたちになって、高度の得点を狙うことだけしか目的にならない。それがどんどんエスカレートして、最後のコンピュータソフトが大学入試というソフトになって、終わったとたんに「you win」というかたちで、入試合格・ゲームオーバーというかたちになるのですが、そうするともうゲームオーバーになったんだから、こんなことは勉強したくないということになります。まあ「machine wins. Do you wish to repeat?」、「コンピューターが勝ちました。もう一度やりたいですか」、不合格の場合にはそうなりますけれども、基本的にその大学に至るまでの勉強がそういうかたちになっている。自分の頭で考える、借物でない自分の言葉で話すという習慣が育てられていない。そのような人達をつかまえて、大学で教養の講義をする場合に、教養教育をする場合に、何が手がかりになるんだろうと。このへんはやっぱり大きな問題になってくると思うんです。

それともうひとつ、この大学の教養教育の問題を考える場合に気になるのは、教養教育と専門教育の分け方、時間の配分などの関係です。この間も広島と山口でマツダ自動車とトクヤマという化学会社に行って、企業内教育のことを教えてもらいました。人事担当者や企業内教育担当者の発言によると企業は基本的に高度な知識を持ったすぐに使えるタイプの人というのは求めている。それは寺嶋先生がおっしゃったことをそのまま裏返しするんですけれども、そうすると、それでは技術者として採用するのに文学部の卒業でもいいんですかと僕は聞いたんですが、それは困るという返事でした。ただ、計数だとか数字の処理にアレルギー的な、つまりそれを拒否するような人では困る。そうでなくて基本的理工系の知識を持っている人であれば誰でも訓練できる、という話でした。そのように考えてみると、今の大学がやっている専門課程が肥大して、教養課程が非常に圧縮されている現状というものは、教養教育を考えるうえで考えておかなくてはいけない問題ではないかと思います。例えば、ここに広島大学・大学教育研究センターが調査した、卒業生から見た広島大学の教育という卒業生が卒業後何年かたって大学での教育をどのように考えているのかという調査の報告書があります。これは80年、78年から80年、82年から92年、そこまでの卒業生から無作為に抽出したサンプルにいろいろ質問書を出して、そこで自由回答をしてもらったものがここに載っています。それを見ていくと、基本的に教養教育の必要は認めているけれども、拒否しているのは今までの一般教育のやり方の手法の問題だと思うんです。手法だけを変えれば何でも教養教育になるのかという問題も出てくると思います。例えば、経済人の倫理の問題だとか、あるいは医者倫理の問題など、これは教養教育として対処すべき問題なのか、あるいは専門教育の中で充分に扱われなければならないものなのかという問題も、ここで出てくると思います。それから、特に工学部の卒業生のリアクションで、自由になる時間がなかったと、非常に受講科目が多くて朝から晩まで実験室にいたり研究室にいたりして時間をとられていた、だから、一般教養をとるのが時間的にぎりぎりだったというようなことを書いています。学生に自由になる時間を与えない体制の中で、教養教育ということが可能なのかどうか、教養教育云々を論じる前に大学全体の在り方を、学生の生活に注目して考えるべき問題だと思います。このようなことも考えているわけです。基本的に、マニュアル的な手法で成功を求める社会から、そのような世界観から抜け出せることを可能にする教育というものを考えていくと、大学での教養教育というものの姿が見えてくるのではないかと思います。

それから今の大学の場合は、以前の大学の在り方がそれほど参考にならないのではないかと思います。今の大学生が持っている大学生活というのは、かつての大学生が持っていた大学と違う。つまり、以前の大学では、大学の中にしか新しい知識というものがなかった。ところが今は、新しい知識は探そうと思えばどこにでもある。かえって大学の授業に出席しない学生、大学の授業を見てこれではあまり役に立たないと判断して、大学に出てこないで他に知的刺激を求める学生の方が、正しい大学生活をしてるんじゃないかとすら、考えられると思うんです。基本的に人間的教養につながるような教育をするとなると、この京都大学高等教育教授システム開発センターが出された紀要の創刊号にあるようなチュートリアル手法に収斂はしていくと思いますが、何でもチュートリアルでやっていって済むか

という問題は、またさきほどの話に戻りますが、高等学校での教育が何であったのかという問題と絡んで来て、もう一度、大学は何なんだと、大学と高等学校の仕事の sharing（シェアリング）はどういうふうになるべきかということも、考えてゆく必要があると思います。様々な理由で、大学に入学した学生がある一定のレベルに達しないと、それに追いつくようないろいろな手段を講じる、レメディアル教育がなされる。レメディアルの教育、つまり落ちこぼれる者を救済するようなかたちの教育を大学がやりだすと、今度は日本の高等学校が空洞化するのではないかと思います。ウィリアム・カミングスが私どものセンターの同僚に言ったそうですが、アメリカの教育制度というのはハイ・スクールさえなかったら本当にいい制度だと。つまり、だるま落としみたいにまん中をぽんと抜ける可能性がある。一般教養教育というのはそのような教育制度全体の問題を中に含めていると、私は思っております。

私の本日の役割は大学の教養教育についていろいろな切り口を提示することだそうですから、このあたりで終わらせていただきます。